

呼吸器内科専門研修(呼吸器内科・呼吸器腫瘍内科)のお誘い

国立病院機構大阪刀根山医療センターは、創立 102 周年にあたる 2019 年 4 月に 100 年近く呼称してきた刀根山病院から名称を変更しました。北摂(大阪府北部)エリアの呼吸器内科としては最大の規模を誇ります。多くの専門科の中で、将来の専門として呼吸器内科・呼吸器腫瘍内科を、しかも当院を研修施設の選択の一つとして考えていただいている先生方が、このページを見に来てくれていると思います。関心をお持ちいただいた若い先生方に感謝しております。

呼吸器内科・呼吸器腫瘍内科の研修について

呼吸器内科(呼吸器腫瘍内科)は様々な疾患を対象とするため、内科のなかではなかなか全体の概要が見えてこない専門科の一つです。しかし、見方を変えると、呼吸器内科の患者さんは、腫瘍、炎症、感染症と多岐にわたり、内科の中でも幅広い守備範囲を持つ subspeciality です。肺癌は、御承知のように全癌腫のなかでも死亡者数が 1, 2 を争い、年間約 8 万人にのぼります。また、COPD は潜在患者数が多く、高齢者の数%に及ぶと推測されています。びまん性肺疾患は、その種類が多岐にわたり、鑑別診断には多くの症例の経験が必要になります。また、高齢者の増加に伴い、呼吸器感染症も増加しています。肺結核の発症率は大阪府が全国一で、減少傾向にはありますがいまだに患者さんは少なくありません。それにもかかわらず、呼吸器科医はこの大阪地区でも不足しています。呼吸器内科に興味をお持ちいただいた先生方が、総合病院を 3 年研修されたあとに、呼吸器内科の専門の研修を行う場合の選択肢はいくつかあります。

総合病院の呼吸器内科

呼吸器専門病院(旧国立療養所系が多く、当院も含まれます)

がんセンターの肺癌部門

いずれも一長一短があります。では、研修で何を学べばいいか。

できるだけ多くの呼吸器疾患の患者を診て、経験を重ねる。
すべての呼吸器疾患について発症から遠隔期まで経過を診ていく。
多くの指導医の考え方や治療方針に触れて、自己に取り入れていく。
積極的に学会活動に参加する。
可能な限り各学会の専門医を取得する。

当院での研修はそれが可能です。

当院での呼吸器内科、呼吸器腫瘍内科研修の特徴

1. 受持ち患者の疾患は、肺癌から肺結核まで、呼吸器内科全般に渡ります。肺癌、あるいは一般呼吸器疾患に重点を置いて研修を希望される場合も対応可能です。レジデントの先生は研修に必要な患者を集中して受け持つことができます。
2. 市中の急性期病院と異なり、長い期間にわたり肺癌や慢性呼吸器疾患の患者さんとじっくり向き合えます。
3. 呼吸器学会指導医 7人をはじめ中堅の専門医が多数在籍しています。
4. 専門学会での発表はほとんど duty にしています。総会 1-2回/年 地方会 2-3回/年
5. 呼吸器学会などの専門医を取得するために必要な業績を取得できるようにしています。

当院呼吸器内科、呼吸器腫瘍内科部門の特徴

当院の呼吸器内科診療は以下の通りです。

呼吸器内科は、北摂一円から呼吸器全般にわたり、患者が紹介されてきます。比較的進行した呼吸不全の患者さんが集積しています。閉塞性肺疾患の分野では、運動負荷心肺機能検査を行い患者さん個々に適した呼吸リハビリテーションを早くから導入して症例を重ね、数多くの研究報告をしてきました。重症気管支喘息に対する生物学的製剤導入も積極的に行い、2016年より気管支サーモプラスティも実施しています。間質性肺疾患も症例は多く、診断あるいは抗線維化治療を行っています。また、免疫内科医が着任し、整形外科がリウマチ診療にも力を入れている関係で今後膠原病肺の症例の増加が見込まれます。抗酸菌症に関して、まず結核については、結核隔離病棟は2019年3月末で閉鎖しましたが、一般病床の中に結核モデル病床(陰圧病室)を13室設置しています。北摂一円から肺結核疑い患者の紹介があり、結核の診断、入院での治療導入、外来治療を行っています。基本的な結核診療に関しては、十分な研修が可能です。また、今後患者の増加が確実な非結核性抗酸菌症に関しては、以前から多数の症例を経験し、当院を中心に開発した抗 MAC 抗体は保険収載され広く臨床で用いられています。

呼吸器腫瘍内科も北摂一円から患者が来院し、新規の肺癌患者が年間約 250-300 例、新規の化学療法の導入も約 110-130 例 と大阪府内でも有数の患者数であり、十分な症例を経験することができます。またがん専門病院とは異なり、多くの患者さんに対して終末期に至るまで継続して対応しますので、一貫した肺癌診療を経験することができます。近年新たな分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤が次々と登場し、治療のスキームが大きく変わってきています。専門施設に在籍していると化学療法の最先端の情報を得ることができます。臨床研究に関しては、全国規模で肺癌の臨床試験を行う WJOG や関西地区の肺癌専門施設のグループなどに参加して、癌化学療法の臨床試験を多数行っています。

呼吸器の検査では(呼吸器内科系全体で)、気管支鏡が年間約 500 件(EBUS-GS EBUS-TBNA も多数)、CT ガイド下生検約 10 件、局麻下胸腔鏡約 10 件などで、十分な経験を積むことができます。

大阪刀根山医療センター呼吸器専門プログラム

本院が基幹施設となる呼吸器専門プログラムを設置しております。

本院のプログラムには連携施設として、近隣の公的病院である、市立豊中病院、市立池田病院、市立吹田市民病院、済生会千里病院、国立病院機構病院である大阪医療センター、大阪南医療センター、そのほかに大阪大学病院、市立東大阪医療センター、公立学校共済組合近畿中央病院(伊丹市)、関連施設として箕面市立病院が含まれています。

なお、このほかの病院で呼吸器内科の研修を始めた先生もプログラムの移動という形で対応が可能です。詳細はお問い合わせください。

2020 年夏の段階ではまだ学会から十分なプログラム登録が行われておりませんが、レジデントの先生方に不利益にはならないように配慮が行われることになっています。

本院での研修まで

現在 新内科専門研修を研修中で、6 年目以降本院での呼吸器研修を御希望の先生は直接本院に御連絡下さい。

呼吸器専門医資格の取得について

多くの先生方は呼吸器専門医を取得することを希望されていると思います。2015 年までに卒業された先生においては、従来の研修制度になります。新呼吸器専門医制度と専門医取得要件の詳細については、呼吸器学会のホームページを確認してください。

呼吸器専門医を取得するに際して最も高いハードルが、論文業績を3報そろえることです。日常診療で多忙な市中の病院では学会発表はできても、なかなか論文作成までは手が回りません。しかも、みなさんがよくご存じの呼吸器学会誌は、2012 年から隔月発行となったため、論文掲載が厳しくなりました。その様な状況ですが、本院は症例数が多いため学会報告できる比較的珍しい症例も豊富です。論文執筆も奨励し、この10年間では卒後5、6年目までの若手の先生のほとんどが論文を作成しています(リストは各科紹介のところにあります)。症例報告などの論文を書くにはちょっとしたコツがありますし、投稿も結構面倒ですが、掲載までフルサポートします。もちろん、がんばって英文論文を作成する場合も同様です。また、そのほかの呼吸器関連学会も認定施設ですので、気管支鏡専門医、がん治療認定医、結

核・抗酸菌専門医、緩和医療専門医などが取得可能です。(詳細はお問い合わせください)

当院研修後の進路

研修終了後については、条件が整えば当院で常勤医として勤務を継続することが可能です。また、当院の呼吸器(腫瘍)内科は大阪大学の関連施設です。基礎・臨床研究、あるいは他院の呼吸器内科で臨床を継続することを希望される場合には、大阪大学の担当の先生に御紹介いたします。個々の先生方の御希望に応じて進路を相談させていただきます。

最後に 長文をここまで読んで頂いてありがとうございます。ホームページですからあまり踏み込んだ内容にはできませんので、もし興味をお持ち頂けた先生は御連絡をいただければ幸いです。呼吸器内科医の先輩としてお伝えできることがきっとあると思います。当院での研修を希望され、みなさんと一緒に仕事ができることを心待ちにしています。

呼吸器内科部長 木田 博

呼吸器腫瘍内科部長 森 雅秀 お問い合わせは

(お問い合わせ

kida.hiroshi.sv@mail.hosp.go.jp

mori.masahide.fr@mail.hosp.go.jp まで)